うきしま

第43号
平成22年3月19日
PTA広報部

平成二十一年度 祝 卒業式

平成二十二年三月一日（金）午後六時二十分より、浮島分校体育館にて第六十一回卒業証書授与式を挙行いたしました。

本年度は、十三名の卒業生がそれぞれの進路へと巣立っていきました。

平成21年度 京都府立東舞鶴高等学校浮島分校 卒業記念

卒業式では、国歌斉唱、校歌斉唱の後、福井校長から卒業生一人ひとりに卒業証書が手渡されました。引き続き校長式辞、冨林PTA会長の祝辞、来賓紹介、祝辞・祝電披露が行われ、在校生送辞を三年生の堀田生徒会長が述べると、卒業生を代表して石塚巳紗さんが、感動的な答辞を披露してくれました。

この後、卒業生から学校へ記念品の贈呈があり、多目的教室に置く、掛け時計を頂きました。そして、全員で蛍の光を斉唱しました。

閉式の後、全国高等学校定時制通信制教育振興会より、「生徒会活動功労者賞」に、石塚巳紗さん、「部活動功労者賞」に野瀬　光さんが表彰を受け、福井校長より賞状が手渡されました。

最後に、本年度もスライド上映「浮島の思い出」をしました。

卒業生の退場では在校生から花束が贈られ、定時制ならではの心温まるフィナーレとなりました。

★祝辞披露

「PTA会長の祝辞を紹介します。」

PTA会長　冨林厚子

春の足音が聞こえつつある、今日この頃、本日、卒業式を迎えられましたみなさん、おめでとうございます。

今日からみなさんは、新しい人生のスタートをきることとなりました。

卒業後の進路は、さまざまでしょうが、どこへ進もうとも、本校で学び経験したこと、また、築きあげた友情は一生の財産として残ることでしょう。特に、昼働きながら夜学ぶという生活を続けた人、いろいろな課題を抱えながらも頑張り続けた人、それぞれに言葉では言えない苦労があったことと思います。それら苦難を乗り越えこの日を迎えた皆さんは本当に素晴らしいと思うと同時に、それを誇りに感じて欲しいと思います。

さて、これから社会人としての生活が始まるわけですが、自分の思うように行かないのが人生です。今後幾たびの困難を必ず経験するでしょう。でも、常に前向きに考え、逃げることなく頑張って欲しいと思います。

後になりましたが、保護者の皆様、本日は、ご卒業誠におめでとうございます。家族のバックアップがあってこそ、今日の卒業が迎えられたと思います。

PTA代表といたしまして、いままでのご協力に感謝いたします。ありがとうございました。

今後も、人生の先輩として、時には厳しく指導したり、相談に乗るなど、アドバイスをいただきたく存じます。

卒業記念品（掛け時計）

なお、最後になりましたが、校長先生をはじめ、教職員の皆様には、今日に至るまでのご指導本当にありがとうございました。

生徒達の失礼なる言動が多々あったことと存じますが、粘り強い教育に感謝いたしますとともに、浮島分

校の益々のご発展をお祈りし、簡単ではありますが、ＰＴＡを代表しての祝辞とさせていただきます。

本日は、誠におめでとうございました。

★お祝いの言葉

ＰＴＡ副会長　峰崎光幸

四年生の皆さん、御卒業おめでとうございます。この間楽しい学校生活が送れたでしょうか。今までは、学生ということで許されていたけれど、卒業すれば現在の厳しい社会生活の中でいろんなことに一人で立ち向かって行かなくてはなりません。そんな時もしかしたら役立つかもしれない、「がばいばあちゃん」の言葉を送ります。

◇二人、三人に嫌われてもあと地球には六十億人いるよ。

◇「金、金と言うんじゃなか」一億あったって金魚一匹つくれんばい。

◇まず仕事をしよう。仕事さえすれば、みそ、醤油、米、友だち、信用がついてくる。

◇通知表は「０」じゃなければええ。１とか２を足していけば、５になる。人生は総合力だから。

◇もし、自分を悪く言う人がいても、気が合わないだけと思え。

◇頭がいい人だけでも、アホだけでも、世の中はうまくいかん。両方おるからええ。

どこを向いても、不安だらけの世の中ですが、そんな時だからこそ、笑顔とユーモアを忘れない大人になって、これからの人生を歩んでいってください。

”笑う門には　福来たる”

一人ずつ卒業証書授与

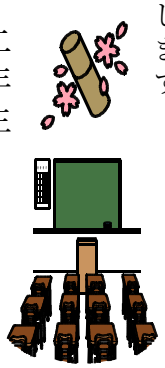
★一年生

担任　山本彰治

早いもので気が付けば一年間が終わろうとしています。当初十八名でスタートした山本丸でしたが、各自それぞれの理由により転学、休学、退学を含め五名の生徒が一年生から去っていきました。さらに高校での単位修得のシステムがわからず中学と同じ調子で休み続け、気が付けば各教科が欠課オーバーになった生徒や、欠課オーバーぎりぎりになる生徒も出てきました。しかし何とか踏ん張り現在の十三名は進級できる見込みです。

一年間を浮島で過ごすと学校のシステムや学校生活にも慣れ、すっかり学校に馴染んでいるようです。しかし悪知恵も覚え、授業集団で中抜けするということもありました。何のために何をしに学校へ来ているのかということをもう一度春休み中に各家庭で考え、二年生では一年生の見本となる行動や姿を見せてほしいと思います。

この一年間は教科の受け持ちがなく、ＨＲでは口やかましく色々と生徒に対し注意をし生徒にはうっとうしい担任だと思われていますが、これからも良い意味でうっとうしがられる先生であり、生徒に対しては時にやさしく、時に厳しく接していきたいと思います。一年間至らぬ担任ではありましたが、各家庭におかれましては何かとご協力いただきありがとうございました。来年度も全力で頑張りますのでご協力のほどお願いいたします。



★二年生

担任　浪江大輔

平成二十一年度二年生は十五名でのスタートでした。復学、転学してきた仲間を迎え、新たな雰囲気で学習活動に向かいました。

体育館が耐震補強工事に入ったこともあり、週二単位の体育は多目的教室に卓球台を持ち込み、まさに卓球一直線（？）でした。当初は飽きてきていた生徒もいましたが、上達するに従い「面白くなってきた！」と口にする生徒も出てきて、一種目に集中して実技を行っていくのも悪くないなと感じたりもしました。

十一月には体育館の工事も完成し、文化祭を行う事ができました。二年生は紙芝居「もうえんちゃう？桃太郎で」を上演しましたが、二年生のメンバーが初めて

自分たちで企画・製作・上演をした作品でした。

模擬店では「海軍風カレー」を販売し、こちらも大好評でした。

生徒たちは日々の授業や行事で次第に成長していきました。しかしもっと成長できます。私も要求し続けていくつもりです。今後もこの子たちは成長を続け、健全な大人になっていって欲しいと思います。高校生の年代はとても感受性が高く、良くも悪くも大きく変化していきます。この不景気の中、彼らをとりまく環境は決して優しくはありません。時には彼らに冷たく、辛く立ちはだかると思います。そんなとき生き抜いていける力をこの子たちに与えられるよう、今後もがんばっていきます。

★三年生

担任　余田翔太

二学期の半ばから欠課時数の増加した生徒が数名いましたが、三学期は気を引き締め、目立った休みもなく登校できました。しかし、毎年同じことを繰り返しています。追い込まれなければできないのではいけません。また、休まず登校できたことは評価できますが、年間を通して三年生の課題であった「授業中の落ち着き」がまだ改善されていません。全員が授業に出席していても私語、携帯電話などの問題があります。一人が注意されることで、授業が中断し最終的には全員に迷惑がかかります。「学校には何のために来ているのか、今は何をする時なのか」をもう一度考え、最低限のマナーを守り、それぞれが集中して授業を受ける環境を作ってほしいです。その状況の中でもコツコツと毎時間しっかり取り組み、試験前に勉強し少しずつですが力をつけている生徒もいます。これからは、今までできなかったこと、やらなかったことに挑戦し、卒業に向かいお互いが協力できることを願っています。

感動の答辞

★卒業担任として

担任　森脇尚志

三月一日には、無事十三名が巣立って行った。立派なセレモニーになったの、この日までやり切ったという彼らの自負心ではなかったか、と思う。その充実感をいつまでも忘れて欲しくないという思い一入である。

これまでは、身近な大人に対する依頼心と依存心が何をおいても先行し、彼らの充足感を充たしていた訳であるが、これからはそうはいかない。「子供」であったこれまでは、いわゆる「自己責任」の世界からは免除されてきたであろう事象も、これからはそんな訳にはいかないのだ。その自覚があるかどうかは、彼らの今後の生活を見ていれば分かるのではないか。「頑張ってるんやなあ」との言葉を、将来発せられることを、卒業担任としてひたすら願うものである。

頑張るためには、「心身の耐性」を上げなければならない、ということは言を待たない。それができなかったからこそ芽生えそして増長した依頼心であり、依存心であったのだ、と気付いてほしい。

卒業という一つの節目を機に、脱皮にも似た成長を果たして欲しいと、担任は切に願っている。これからが人生の本番なのだから。

★定年です。

教務部長　羽柴　保

浮島分校の卒業生である姉弟が訪ねてきてくれたのは、卒業式の日、開式の時刻が近づき、着替えをしていたところでありました。弟君は昨年の春卒業で、姉さんは四年前の春卒業であり、私が彼女の最終学年の担任でありました。弟君の来訪は元担任を通して知らされてはいたましたが、姉さんがいっしょとは思いもかけぬことで、「えっ、何で？」と二人の姿を見つめていると、さらに思いもかけぬことが準備されていました。「姉弟そろってお世話になりました。」の言葉といっしょに花束が差し出されたのです。この三月末でもって定年退職を迎える私の「卒業」を祝い、謝

意を伝えに、卒業式の日を選んでわざわざ訪ねてのことでした。心の底から嬉しさがこみ上げ、開式間近にしながらも我が身に起きたこの出来事に、しばし感激の淵に浸っていました。

頂いた花束は、一昨年夏に他界した母親の遺影の前に活け、朝晩の勤めに和んでおります。定時制課程への異動は、午前中、母親の生活の介助が可能となり、他界するまでの八年半、ありがたい時間でありました九十五歳で他界するまで、心のよりどころは母親にあったと人生を振り返るのですが、仕事に対する気質は、父親からのものではと思い浮かべています。父親は、若い頃は左官職人で腕の良さは評判であったと母から聞かされていました。が、その日稼ぎの生活は大変だったようで、戦後、民間の造船所に生まれ変わる前の海軍工廠時代に、左官の腕を生かせる部署の工員として月給取りになったようです。その職場でも職人気質の仕事ぶりであったようで、家庭でもそんなことで私には近寄りがたい存在で。じっくり話を交わした思い出はありません。しかし、これまでの教員生活を振り返ったとき、仕事に対しての身上には父親の遺伝子がより濃く影響していたように思っております。あれこれ教えを直接受けてのことよりも、若き頃はベテランの先生あるいは同年代の先生、そして年を重ねてからは若手の先生の仕事ぶりを見、聞き、触れ、この仕事の有り様を築き上げてきました。

非常勤講師として浮島分校の教壇に立ってから教員生活三十五年間、その終止符を打つときがすぐそこまで来ています。今はまだ目の前の仕事に追われ慌ただしい日々が続いていますが、任務を全うしてその日を迎えられるよう、一日一日刻んで行きたいと思っています。

実は、三月一日には、もう一つ私にビッグプレゼントがありました。大好きな飲み物を袋に入れて、昨年春の卒業生が卒業式後に訪ねてきてくれました。思いもしないことに喜びは大きく、彼が添えた言葉に、在学時のやりとりをそんなふうに思っていてくれていたのかと、深く深く心にその思いが染みいり、三十五年間、この仕事をしてこれたことをありがたく思わずにはいられめせんでした。九年間の浮島分校勤務は、二番目に長い勤務校となりました。

最後になりましたが、この間、保護者の方々からは暖かいお言葉あるいは激励のお言葉を頂き、まことにありがとうございました。皆様方のご健勝をお祈りも申しあげます。

■進路指導部

部長　桝本修作

生徒たちが努力を重ねるなかで、合計十三名の生徒が巣立っていきました。内訳は、就職については、学校紹介就職（正社員）三名、縁故および継続就職（正社員・準社員・アルバイト）八名でした。進学については、二名の生徒が予定しています。本当に生徒たちのがんばりは見事でした。厳しい経済状況のなか、就職試験等の難しさは必至です。このようなかなか、特に、生徒諸君に伝えたい就職および進学試験に合格するポイントを紹介します。

一言でいうと、最近はどうも、『学力』が合否の分かれ目の重要な一つになっているようです。具体的にいうと、『授業』をきっちり受けているかどうかが問われているのです。浮島分校の四年間で学力をきっちりつけることで、是非とも、自分の人生をグレードアップしてほしいと願っています。やるべきことをやれば必ず合格します。逆に言うと、結果が出ない場合はやるべきことをやっていないからです。

もうすぐ、新学年が始まります。生徒諸君には、一時間一時間の授業の中に目標をつくってほしいと思います。生徒と保護者と教職員がスクラムを組んで生徒一人一人の進路目標達成に結集しましょう。

☆☆　編集後記　☆☆

「光陰矢のごとし」あっという間の一年間でした。一年間お世話になりました。

広報　藤田厚司

今後の予定

三月三十日合格者登校日
四月　八日　始業式
九日　入学式